



第14回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

高齢化社会を考える

兵庫県・西宮市立西宮高等学校 1年 田淵 瑚華

私は、中学生の頃から陸上競技部に所属している。そのため接骨院には何度もお世話になっている。体の痛むところに電気を流してもらったり、レーザーで筋肉をほぐしてもらったりと疲れた体を癒してもらう。そんな至れり尽くせりの施術はいつも1,000円以内で済んでいる。ところが、先月、母の友人の紹介で別の接骨院に行ってみた。そこで私は骨盤矯正の施術を受けた。そして支払いをしようとする「3,000円です。」と言われた。その時は平気な顔をしていたが内心高いなと思った。それにしても、なぜこんなに料金が違うのだろうか。気になって領収書を調べてみると、いつも行っている接骨院には負担30パーセントと書いてあったのに対し、もう一方の接骨院は金額しか書かれていなかった。骨盤矯正は特殊な治療なのだが、保険が適用されないと、ここまで差が出るのかと改めて実感した。毎回、合計金額の30パーセントしか払っていないので、医療費がそんなに高いと思わなかったが、残りの70パーセントはどのように負担されているのか詳しく知りたくなった。

日本では全ての人が公的な医療保険に加入する国民皆保険制度がある。医療保険による治療を受ける場合、医療機関の窓口で被保険者証を提示する必要がある。残りの70パーセントは健康保険料によって支払われているのだ。そう、国民全員で支え合っているのだ。

社会保障関係費は、日本の歳出のうち33.1パーセントと最も高い割合を占めていて、31兆9,738億円にもものぼる¹⁾。2006年度の数字ながら、対国民所得比の国際的な比較によると、アメリカを上回るものの欧州諸国と比べると低い²⁾。しかし、世界で一番高齢化率が高いのは日本である。このまま高齢化が進むと60年には2.5人に1人が65歳以上、4人に1人が75歳以上となってしまう³⁾。それに伴い社会保障関係費も増加していくだろう。

ここで高齢化と医療費について思うことがある。私の祖父母も、ありがちな

ことだが、自身について健康であると自覚しながらも、病気に対する不安感や病気予防や健康維持のために頻繁に医者にかかる。私はそのような高齢者の通院を減らす方法は身近にあると思う。それは、かかりつけ医を作ることだ。かかりつけ医とは普段からコミュニケーションをとっているため患者の不安を解消しやすく、少しの変化にも気付くことができる。その結果、過剰な検査や安心のためだけの薬の投与が減り、国が負担する医療費を抑制することができる。

また、地域での高齢者のネットワークは不可欠である。高齢者にとっていつも心を健康に過ごすことはとても難しいことだと思う。みんなが高齢者の方々と接する機会をもっと増やすべきだ。お年寄りの方に喜んでいただき、私たちも生きてこられた経験の中からたくさんのことを吸収することができればこんなに良いことはない。私もできることから実行したい。田舎の祖父母と積極的に連絡を取るよう心がけたいと思う。

少子高齢化が進む中での医療費の膨張は避けられない現実だ。消費税率は2014年4月1日8パーセントに引き上げられた。それは、高齢化で増え続ける年金や医療などの社会保障費を補う狙いとされていた。けれども、それだけでは足りず、3年後さらに10パーセントに増税される見通しだ。確かに消費税増税などによって国の予算が増える分、社会保障制度は安定するかもしれない。しかし、収入を増やすことよりも支出を減らすほうが近道であると私は考える。

日本の6月末時点の国の借金残高が8月10日財務省によって発表された。総額1,053兆4,676億円で、前回発表の3月末時点から4兆1,015億円増えたという。国民1人当たりでは約830万円の借金を抱えている計算になるのだ⁴⁾。この借金が年々増え続けているのを目の当たりにして国民が黙っていられるはずがない。そこで私は、やはりこれからの日本に医療面で必要なことについて考えを進めてみたい。

その一つは、相互扶助の精神ということだ。ついこの間まで伯母が言っていたことがある。それは介護保険料を払い続けているが、まだ利用していないので損だというような内容だった。伯母は健康でほとんど病院にも行かない。それに対して伯母の同い年の友人はデイサービスを受けているほか、病院にもしょっちゅうかかっている。一方的に払うばかりで得るものは何もないと思っていたようだが、そんな伯母の考え方が最近変わってきている。体が弱って払っ

たお金が戻ってくるよりも、健康であるほうがずっと幸せだと感じたようである。実際、いつ健康状態が悪化するかも分からないし、いざ要介護の立場になった時、少しの自己負担金は発生するものの、その恩恵を受けることができるのだ。今、自分が納めている保険料が苦しんでいる誰かを救い、助け合って生きているという考え方を持つことで無駄な通院や介護保険料などの滞納者が減るだろうと思う。

二つ目は国民全員が健康に努めるということだ。祖母の住んでいる養父市の地元放送テレビでは、いつも「やぶからぼう体操」が流れている。私はあまりに簡単な体操なので単に子供たちの利用のために提供されているのだと思っていた。しかし、調べてみると養父市は高齢化率、後期高齢化率が県内でもトップであるということが分かった。「住民がいつまでも元気に暮らし続けられるまちづくり」を目標に、「こどもから高齢者までが一緒に楽しめて、介護予防や異世代交流による地域づくりも目指せるような体操を作りたい」という思いで発案されたそう⁵⁾。このような取り組みはご当地体操として全国各地に広がっている。東京都荒川区では、体操が生まれた2002年度の同区の要介護認定率は都平均と同じ割合だったのに対し、2014年度には都平均18.0パーセントを下回る17.3パーセントという効果も示されている⁶⁾。また、ある県の自治体では高血圧の患者が多いその対策として、各家庭へ減塩食の指導が行われているという。

この夏休み、祖母が早朝にそそくさと出かけるので何があるのかを聞いてみると「ラジオ体操をしてポイントを貯めるねん。」と嬉しそうに言っていた。ポイントを貯めるとクオカードやごみ袋がもらえるからと、はりきって運動する姿は生き生きとしていた。「健康寿命を延ばさなければね。」というのも祖母の口ぐせである。毎朝近所の人と交流したり、体を動かしたりする楽しみができていただけでなく、国や地方の医療費を減らす一助になることを考えると一挙両得だと思う。

つまり、医療費は節約すべきなのだ。患者は自らの心身のことなのに医師に依存しすぎている。自分の健康は自分で管理する意識を持つことがとても重要だと、私は思う。費用は3割しか払わなくていいのだから、どんな時でもすぐに病院に行けばいいではなく、常に健康増進に心がける。そして、本当に必要

な人のためにつかうべく、医療費を必要最低限に抑えるという考え方に変えていかなければならないと思う。国の借金が少しでも減り健康な高齢者が増えることが、ひいては私たちの老後のためになるのだから。

(注)

- 1) 国税庁 国税の学習コーナー「歳出～社会保障関係費～」
URL <http://www.nta.go.jp/shiraberu/ippanjoho/gakushu/hatten/page04.htm>
- 2) 厚生労働省「社会保障の給付と負担の現状と国際比較」平成21年9月
URL <http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2009/09/03.html>
- 3) 内閣府「将来推計人口でみる50年後の日本」『平成28年版高齢社会白書』、平成28年5月20日
URL http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/s1_1_1.html
- 4) 朝日新聞 2016年8月11日「国の借金、総額1053兆円 1人あたり830万円 6月末」
URL <http://www.asahi.com/articles/DA3S12506633.html>
- 5) 公益財団法人兵庫県健康財団健康づくり部 健康ひょうご21 県民運動ポータルサイト「やぶからぼうたいそう／養父市④」
URL <http://www.kenko-hyogo21.jp/health/kenkou-taisou/253/>
- 6) 朝日新聞 2016年7月31日「ころばん体操、どういう効果があるの？」
URL <http://www.asahi.com/articles/ASJ7031V2J70UBQU00D.html>

